

第二期 第七十一号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 06. 20 定有堂書店 発行

固定観念

奈良 敏行

ずっと様子を見ている

ワクサカソウヘイ

汽水のほとりから (15)

小原 修治

兆民とゲーリングはかく語りき

萩原 俊郎

極夜をめぐって

松田 裕史

学びの地産地消について

芝野 浩貴

YBCでコーヒーを

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十

内田 克彦

八代日記 (二十七)

齊藤 仁昭

「イワンの音楽」2022

秦阜 梅林

本屋になるかもしれない人の備忘録

三浦 永理

カレー

あぎの素生

レンキン☆ドリーム

ドラメラア

…… 編集後記



固定観念

奈良 敏行

(定有堂 店主)

新潮文庫の新刊に、『氣狂いピエロ』が入っていて驚いた。ゴダールの有名な映画だが、原作があったとは知らなかった。驚きは三つだった。世間を騒がした作品だったのに、原作の日本語訳は、この度が初めてだったということ。もう一つは原題が『OBSESSION』だったと知ったこと。

オブセッションとは観念に取り憑かれることで、妄想、強迫観念の意味だ。わたしはこの言葉の使い勝手がよく、思考のアイコンのように多用している。私的衝動の初発性ともいえる。ただ訳語としては「固定観念」を選びとる。現実には根拠はなく観念レベルの衝動なのだ。ヴァレリーの『テスト氏』を読んだ頃に知った言葉だ。後に『固定観念』(Idee fixe)という著書があることも知った。

三つ目は、このオブセッションの志向対象が、「ファム・ファタル」という破壊をまねく女だ、と解説してあったことだ。この指摘にあうまで気がつかなかった。調べたらヴァ

レリーの『固定観念』も肖像彫刻家の若い女性へのかなわぬ恋が動機だった。そういえば、意図せず惹かれる作品は、そういう系列にあつたのだろうか？ ジイド『狭き門』、グレアムグリーン『情事の終わり』、モラヴィア『倦怠』、シムノン『離愁』が思い浮かぶ。

ファム・ファタルが運命を狂わせるのは、そこに非対称性があるからだろう。そぐわない、手が届かないとわかっているから、慾動が立ち上がる。

わたしのオブセッションは解答のないものに向かう傾向がある。「テスト氏」はたしか「可能性の魔」といつていた。四角い三角のようなものだ。事実上ありえないが権利上ありえる。この次元ではありえないが、異なる次元ではありえる。しかしその次元はわたしのものではない。ここで何かが発火する。

存在論的にはわたしのオブセッションは、ゴーギャン風に「どこから来て、どこにあり、どこへ行く」という問いに似ている。答えのないのはわかっているし、むしろ答えのないところにオブセッションが生まれる。

ところでタイトルに「概念」という言葉があつたせいで『概念と生』という本を読んだ。本が好きという事は「概念の魔」に取り憑かれていたことだ。「どうして超越的なものが超越的でないものの『中』にある『ことが可能なのか』

という一節が気になった。カテゴリーの階層が違うのにくぐり抜けて通じることの不思議だ。解けない謎だが、執拗に念頭を去らないオブセッションの一つだ。

もう一つ読みかけの本がある。『仏教は宇宙をどう見たか』だ。そこにひとつの解が読みとれる。「この世の緒存在を究極の要素にまで分析することではじめて、私たちは自分自身の組成と、その機能を客観的に理解する」(P.21-22)。仏教書だが量子力学の知見をとり入れた本だ。このところ「量子力学の存在論」という切り口でいろんな人に議論を持ちかけている。極微の世界で考えるところの骨子だ。以前感銘を受けた『マルチバース宇宙論』の著者の新刊『なぜ宇宙は存在するのか』が目についたので飛びついた。存在論的な問いを共時的な極微・極大の視点、そして通時的な宇宙の発生と消滅のスケールで受け止めてくれる。結論は「生命は星クズ」でできているということだ。

『氣狂いピエロ』の原作にはないが、映画のラストにはランポオの詩があつた。字幕でどう訳してあつたか記憶にないが、小林秀雄訳では「また見つかった、——何が、——永遠が、海と溶け合う太陽が」となっている。ランポオの「見者」というオブセッションが狂気をはらみ、やがてはヴァレリーの知性が「認識」において制御したと納得していたのだが、『固定観念』の成り立ちをたどると、オ

ブセッションに終焉はなく、何かと溶け合うほかに外部へ
のくぐり抜けは存在しないと気づいてしまった。生成変化
へ還るほかない。血脈をたどればポオの姿があり、『大鴉』
は Never more (けしてない) と結論を語っている。けし
てないのはオブセッションの収束の刻のことだ。

2022. 05. 09

- ライオネル・ホワイト 『気狂いヒーロー』 新潮文庫 2022
ヴァレリイ 『テスト氏』 福武文庫 1990
ポオル・ヴァレリイ 『固定観念』 白水社 1931
アンドレ・ジイド 『狭き門 改版』 新潮文庫 2013
グレアム・グリーン 『情事の終り』 新潮文庫 2014
アルベルト・モラーヴィア 『倦怠 新装版』 河出文庫 2000
ジョルジュ・シムノン 『離愁』 ハヤカワ文庫 1975
多賀茂 『概念と生』 名古屋大学出版会 2022
佐々木閑 『仏教は宇宙をどう見たか』 化学同人 2021
野村泰紀 『マルチバース宇宙論入門』 星海社新書 2017
野村泰紀 『なぜ宇宙は存在するのか』 講談社ブルーバックス
2022

定有堂教室「読む会」(岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室(会場 定有堂二階) 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

ずっと様子を見ている

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

友だちと数人に連れ立って、なにか昼飯でも食べよう、なんてことになる。さて、どこの店に入ろうか。こういう時、無難な店に落ち着くことが多い。私たちは集団性を帯びると、あまり冒険をしなくなる。最適解を見出す先はおおよそ、以前に入って美味しかった海鮮丼の店とか、よい評判を聞いたことのある小洒落たインドカレーの店とか、もしくはチェーン店のレストランだ。

ところが時に、外食の選択肢があまりない街で、なんだか危険な匂いのある店が現れたりする。あまり清潔とはいえない暖簾、薄い埃をかぶった食品サンプル、曇りガラスで見えない店内。誰もが躊躇し、そして誰かの判断を待つ。停滞した空気が途端に流れる。

こういう時に自分たちの背中を押す、魔法の言葉がある。「ちよっと様子を見てみるか」

この一言を発するだけで、とりあえず事は動く。様子を見るために店へと入り、様子を見るために注文をし、様子を見るために箸をたぐり、様子を見終えた証明としてお会計を済ませる。店を出たら、それぞれの「様子を見た」感慨を漏らし合えばいい。意外と美味しかった、予想通りの中途半端な味だった、これまで出会ったこともないくらいの不味さだった。たとえネガティブな感想がこぼれるような結果であったとしても、同時に妙な達成感を得ていたりする。我々は様子を見るために店に入ったのだから、目的は遂行されているのである。

「ちよっと様子を見てみるか」の導入で物事に挑むと、そこに横たわっていたはずの緊張感は、少しだけ緩む。少しだけ軽くなる。

先日、磯をテーマにした市場イベント『磯マーケットフェス』というものを東京で開催してみた。ありがたいことに少し話題となり、いくつかの媒体から取材を受けた。

「どうしてこのようなイベントを開催したのですか？」
インタビュアーさんから最初に必ず聞かれる質問である。どうして、との問いをストレートに答えると「なんかこういうことやったら面白いかな、と思って」という身も蓋もないものになってしまう。そこで私は魔法の言葉を使った。

「磯縛りのマーケットを開いたらどうなるのか、その様

子を見るためです」。こう返すと、相手はとりあえず納得したふりだけはしてくれる（そして私は、たしかにイベントの最中、ずっと『様子』を見ていた）。

『機マーケットフェス』が閉幕したのち、こんどは『青谷弥生人そっくりさんグランプリ』なる鳥取での謎イベントがあり、そこに私はレポーターとして召喚された。一泊二日拘束の仕事であったのだが、私はその行程においてもずっと、様子を見ることに勉めた。「様子」というものは、見るにかぎる。

取材者・執筆者として動く時の私は、まさしく様子を見る者であり、その様子を後に記す者である。そして制作者・主催者として場所を開く時の私は、逆に様子を作る者になり、その様子を商品然とさせる者になる。

「様になっている」なんて言葉があるが、書籍にしても祭りにしても、著者や主催者がただそれを開示するだけでは見るに値する様子は立ち昇らない。普段から様子を見ることに固執し、そして様子を作り上げるための丁寧な立ち振る舞いを経ることで、ようやくそれは「様になる」のだと思ったりしている。

よく、旅をする。旅とはつまり日常から飛び出して、非日常の様子を見る行為であるといえる。旅先で街の様子を見て、ご当地ソフトクリームの味の様子を見て、旅館の様

子を見て、ついでに美術館や郷土資料館の様子も見て、あわよくばそこにしかない生物相の様子も見るなどして、帰路に着く。そうすると、日常の景色が少しだけ鮮やかに変容していたりして、その様子をまた気が済むまで見る。その繰り返し。こうして折り重なる日々は少しずつ、様になっていく。

生きている最中では時折、気の滅入るような季節が訪れることもある。そんな際は心の中で「さて、滅の景色の様子を見てみるか」と唱える。そうすることで、わずかではあるが、重苦しい気分の隙間に風が吹く。やっぱりこれは、魔法の言葉なのだ。

私はずっと、今生の様子を見ている。生きることの様子を夢中になって見続けている。

やがて訪れるであろう曇りガラスの先の「死」とかいいう永遠の景色、それをなるべく鮮明に伺うために、まずは「生」の様子を深呼吸しながら見ているのである。

汽水のほとりから (15)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

去る五月十五日は、沖縄復帰50周年の節目の日だった。

東京と沖縄を結んで式典が催されたが、玉城アニー知事は式辞で基地負担を強いられ続けていることに言及し、祝賀ムードには程遠かったようである。が、今から50年前、

一九七二年の復帰記念式典においても、初代県知事の屋良朝苗(やら・ちようびょう)は式辞で基地を残したままの復帰に、「必ずしも私どもの切なる願いが入れられたとはいえない」と発言し、「これからもおきびしきは続き、新しい困難に直面するかもしれません」と憂慮していた。式典開始前、沖縄会場では、その映像が流れたそうである。

屋良朝苗は、復帰前の一九六八年に一度だけ行なわれた琉球政府の主席選挙に立候補し、即時本土復帰を掲げて、復帰に慎重な保守系候補を抑えて当選した人である。彼は自分が当選したのは本土復帰が沖縄の人々の願いであるからだと日本政府に訴えた。当時総理だった佐藤栄作も沖縄

返還には意欲的であり、米国政府との交渉は佐藤政権の下で進められることになった。米国の政府高官も日本の安保闘争の激化で、反米感情がこれ以上高まるくらいなら沖縄を返還すべきだと考え、双方の思惑は一致していく。

佐藤総理は早期の沖縄返還を進めるには米国の信頼を勝ち取ることが最重要だと考え、ベトナム戦争を支持し、安保闘争の学生運動を徹底的に抑え込み、基地についても当時の東アジアの国際情勢にかんがみて大幅に譲歩した。屋良は、復帰と同時に沖縄の基地を本土並みに縮小すべしと政府に要請したが、佐藤にとっては、中味はどうであれ、総理在任中に沖縄返還を実現させることこそ先決だった。米国側も彼のメンツを潰さないように「核抜き・本土並み」の条件を飲む代わりに、自らの考えを伝えてきた。それは、沖縄の人々にとって皮肉なことに、返還後も基地を自由に使えるのならば、早期返還に合意するというものだった。

戦勝国から敗戦国への領土およびその施政権の返還は、普通に考えれば、敗戦国が主権を回復する出来事であり、戦勝国からの自主自立を意味するはずである。ところが、沖縄返還の場合は、戦勝国への永続的な依存を意味した。つまり、緊急時に米軍が自主的に軍事作戦を決定しても、日本は黙って協力せざるを得ない体制づくりを意味した。この構造は、佐藤栄作の血族にあたる安部晋三が首相時

に閣議決定した集团的自衛権の行使容認が、如何にも日本の国としての自主自立を意味するように見えて、実は更なる米国依存の体制づくりの強化だったこととよく似ている。

ところで、沖繩復帰の日からさかのぼること十日余り、五月三日の憲法記念日も、戦後の新憲法施行から75年の節目の日だった。沖繩の復帰が新憲法施行から四半世紀を経た時点であったという事実は、当時の状況において何を意味したのだろうか。米軍統治下で、言わば平和的生存権を侵害されていた沖繩の人々にとって、基本的人權の尊重を謳う新憲法の下で暮らせるようになることは本土復帰の大きな意義だった。加えて、基地についても、武力放棄を明記した9条がある以上、撤去につながると信じていた。ところが、実はこの時点において9条は基地問題に対して無効であった。背景にあったのは、日米安保条約である。

新憲法施行から四半世紀の間には、本土でも基地撤廃を求める市民運動や学生運動が盛んだった。その運動の原点と言われる一九五七年の「砂川事件」では、米軍基地拡張に反対した人々が在日米軍自体を9条に照らして違憲だと訴え、二年後に東京地裁判決はそれを認めた。ところが、検察側が直ちに跳躍上告した最高裁判決は、統治行為論を根拠に、「安保条約は高度の政治性を有するものであり、一見極めて明白に違憲無効だと認められない限りは、裁判

所の司法審査権の範囲外にある」として、地裁判決を棄却、これが以後の基地問題をめぐる裁判の判例となっていく。

とはいえ、その後、本土にあった米軍基地は、自衛隊の基地に置き換わるなども含め、徐々に撤去されていった。一方、復帰後の沖繩ではそれがほとんど進まなかった。結果、全国の米軍基地の約7割が沖繩に集中することになった。思うに、沖繩が返還されて米軍基地が集中していく過程と安保問題が議論されなくなっていく過程には関連がある。先に述べたように、そもそも沖繩返還交渉は、日米安保に反対する学生運動を徹底して政府が抑え込むことにより前進した面があるし、目の前に米軍基地があれば、嫌でも日常的に日米安保について考えざるを得なくなるからだ。基地が眼前から消え、安保問題に目をそむけたことで、私たち本土の人間に見えづらくなった現実がある。それは在日米軍が憲法によっても縛りがかかることができないう法外な存在だということである。安保闘争の本当の敵は、彼らだったのだ。今や事態は、彼らが戦闘行為を始めれば、日本も否応なく戦争当事国になる所まで進んで来ている。

兆民とゲーリングはかく語りき

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

ウクライナ情勢に便乗して、改憲勢力が勢いづいている。「敵基地攻撃能力」を「反撃能力」と言い換え、基地だけでなく「相手の指揮統制機能」中樞をたたく」などと言っ。もう「専守防衛」のかけらもない。

万一、中国やロシアと国境紛争が起きたら、北京やモスクワの指揮中樞までたたくのか。ウクライナにしても、モスクワまでミサイルを撃ってはいない。国境までロシア軍を押し戻すことが彼らの「勝利」、つまり「専守防衛」なのだ。暗澹たる思いに耽っていると、昔、友人が神田の古本屋街で見つけたという本のことを思い出した。

フランス帰りの明治の思想家、中江兆民が明治二十(1887)年に書いた『三酔人経綸問答』。名前からして古色蒼然としているが、今起きていることが手に取るように

分かる、不思議な本だ(現在は岩波文庫刊)。

ひとたび酔えば政治や哲学を論じてやまない「南海先生」のもとに、洋行帰りの「洋学紳士」と、腕太くバンカラ風の「豪傑君」がやって来て、酒を酌み交わしながら天下のすう勢を語り合う。

洋学紳士は「民主主義の信奉者」だ。アジアの小国・日本は民主制を確立し、「国の経済や財政を圧迫する数十万の常備軍など持たず、一心に学問と工業技術を極めること」で欧米に並ぶ国を」と理想を唱える。

一方、現実主義者の豪傑君は、そんな洋学紳士を鼻で笑う。「そもそも戦争は避けられぬ。古今の文明国はすべて軍事強国だった」。国家間の信頼など、どれほどのものか。兵を集め領土を広げ、小国から大国に成り上がることで「西洋との競争に打って出よう」と主張する。

その結果は、百三十年以上の歴史を経て、みなさんはよくぞ存知だろう。豪傑君は、戦前の日本を支配した。無謀な戦争の末に国は敗れ、戦後は反対に、「身に寸鉄も帯びず、一発の弾丸も持たず」という「洋学紳士」の国になった(はずだった)。

ところが、ここに来て雲行きが怪しい。「世界の形勢

を論じながら、ギリギリの決着とは全国民が手をこまねいて一斉に敵の弾丸に倒れるだけ、というのか。なんというお手軽な話だ」と語る豪傑君の巻き返し。まるまる現代日本の護憲派と改憲派のような論争だ。

洋学紳士の理想はどここの国も達成していない、はるか雲の上。一方、豪傑君の軍備論は、現実的なようで危険をはらむ。南海先生は悩んだ末、「いやしくも国家百年の大計を論ずる場合(目立とうとして)奇抜を看板にし、新しさを売り物にするようであってはいけない」と返すのが精いっぱい、二人の失笑を買ってしまう。この南海先生の言葉私には「核共有を議論すべき」「防衛費を倍増せよ」と意図的に過激発言を繰り返すあの元首相のゆるみ切った顔が浮かんだが、最近はそうした一見「勇ましい」政治家や評論家がちまたに溢れていて心配である。

単純に「軍備悪」と決めつけ、戦争のリアルに目をそむける平和主義はいざという時、国を危うくする。一方、国際緊張を理由にただ軍備への傾斜を強めては、平和への道筋は一向に見えてこない。今や自衛隊は世界の軍事力ランキングで5位という軍事大国。しかし、かろうじて憲法の専守防衛という「留め金」が効いている。



一方、「戦争を起す側の言い分」は、ナチスの最高幹

部ゲーリングが残した言葉が何より分かりやすい。

戦後のニルンベルグ軍事裁判で彼はこう答えた。「運がよくてもせいぜい無傷で帰ってくるぐらいしかない戦争に、貧しい農民が命を懸けようなんて思うはずがない。一般国民は、ふつうは戦争を望まない。ソ連でもイギリスでもアメリカでも、そしてその点ではドイツでも同じ。政策を決めるのはその国の指導者なのです」

弁護士が「いや、アメリカは議会制民主主義の国だから違う」と反論すると、「体制の違いなど関係ない。人々を指導者の望むようにするには、国民に、われわれはこのままでは攻撃されると煽り、平和主義者に対しては、愛国心に欠けていると非難すればいい。このやり方はどんな国でも有効」。そう自信たっぷりに答えたという。

ヒトラーは「ドイツ系住民が迫害されている」とチェコに領土割譲を迫った。どこかで聞いたような話だ。「受け入れがたい脅威が西側によつて作り出された。国と国民を侵略から守るため、やむをえず先制的な対応をしたのだ」(5月9日の対ナチス戦勝記念日のプーチン演説)。皮肉なことに彼の言い分は、ナチスと瓜二つだった。

極夜をめぐる

松田 裕史

(高校教員)

極夜を生きているのは私たちの方ではないか。

そんな思いに駆られたのは『極夜行』（角幡唯介）の中盤、角幡が極夜中の極夜に差しかかった辺りだった。白夜は知っていたが、寡聞にして極夜は読み方も知らなかった。ただ、「極夜」という言葉には惹かれるものがあつた。

仕事に関連する読むべき本が積読されている状態で、なぜ『極夜行』を読もうと思つたのか自分でも分からないが、何か月も前に買つていた文庫本に手が伸びた。ノンフィクションは一、二年に一冊読むか読まないかのペースだが、自分と年齢も近い探検家ということもあり、角幡唯介については『空白の五マイル』、『新・冒険論』を読んだことがある。『アグルーカの行方』は未読。

グリーンランドとカナダの国境付近で二か月以上、極夜を強烈なブリザードに襲われながら犬と共に過ごそうとすること自体、常人には理解しがたいし思いついたとしても

実行に移せる覚悟を持った者はいない。命の危険もある。一発勝負でこの探検に挑んだのかと思つていたが、本文の前に置いてある年表を見るとそうではないことが分かる。極夜探検をするまでに五年間、準備がなされたことが大まかに一ページで記されている。本文が始まる前なのでよく分からない部分もあるが、物語を読み進めるにつれ謎が解けるように年表の意味が分かってくる。

『新・冒険論』で角幡が提唱したのは冒険という行為を現代のシステムから脱する「脱システム」の具現とすることである。地理的には地球上で未開拓の地Ⅱフロロントイアは消失している。グーグルアースにアクセスすれば地球の裏側の様子を窺うことができる。よって、角幡は探検の際にGPS機器は持ち歩かない。太陽が毎日登る世界Ⅱ普通のシステムを脱して、太陽が二四時間昇らない暗闇の世界Ⅱ極夜システムに入り込み、その未知を探るというのが極夜行の目的である。

とはいえ、旅の始まりではある程度、角幡は旅の見通しを持つていた。GPSはないが、特注の六分儀で方角は分かる。旅の途中、アウンナットとイヌアフィアシユアクの小屋には食料と燃料が十分に保存されている。ところが、極夜行が始まって早々、強風によって六分儀は失われる。地図とコンパスのみで暗闇の中を突き進まなければならぬ

い。しかも、アウンナットとイヌアファイアシユアクに備蓄してあった食料は白熊にあえなく食い荒らされており、燃料も容器が破壊され中身がほぼなくなっていた。文字通り角幡は絶体絶命のピンチに陥る。特に、イヌアファイアシユアクのデポが破壊されているのが分かった時には「旅は終わった」と打ちひしがれる。しかし、この想定外の状況が却って本当の「脱システム」を可能にし、極夜を骨の髄まで経験させる契機となる。予定通りの極夜行であれば本書のようなドラマ性は生まれなかっただろう。

極夜の暗黒空間は「意味化以前の未発の世界」と記されている。極夜の「茫漠とした、とりとめのない、まったく不確かな感じ。闇によって視覚情報が奪われることで、己の存在基盤が揺るがされる感じ。普段の生活で意識せずに享受しているが、つちりとした揺ぎない世界から浮遊し、漂流している感じ。それらの感じから感じられる、己の命の儚さや心もとなき。ここにこそ極夜世界の本質はあるかもしれない。」極夜探検という特異な体験自体、興味を掻き立てられるが、同時に、特異ではない私たちの人生のアナロジとして読める。極夜探検に決まりきった答えはない。答えなき旅をどのように生き延びたのか、不測の事態にどのように翻弄されつつも対応し、思考や感情はどう変化していったのか、私はそれを読んで知りたかったのだという

ことを読了してから気づいた。

私たちは VUCA (Volatility: 不確実性・Uncertainty: 不確実性・Complexity: 複数性・Ambiguity: 曖昧性) の時代を生きている。その意味で言うところ、太陽のもとでデジタルツールに囲まれながら生活しているが、本質的には極夜のような世界を生きている。ここ数年のコロナ禍はその状況に拍車をかけている。答えがどこかに転がっているわけではない。

六分儀を失ったこともあり、闇の中で氷床上を移動中、角幡は自分がどこにいるか確信が持てなくなる。それでも、地図、コンパス、北極星を中心とした天体の動きをもとに氷床を乗り越えていく。さらには、足裏感覚で地形を読み取っていくという超絶的な身体感覚が覚醒される。

角幡の言葉を借りれば、コロナは医療的には当初、未知であった。今や既知の存在になりつつある。しかし、根源的未知な位相が残されていることに変わりない。根源的未知とは「状況も方法論も洞察の対象もすべて拓かれていない、位相空間そのものが未知」のことである。私たちにとつての地図は、コンパスは、北極星は何なのか。それがワクチンではないことは確かだ。医療的な位相のみを見るのではなく、そろそろ根源的未知にこそ目を背けず対峙したい。

学びの地産地消について まなび祭レポート②

芝野 浩貴

(地球探検家)

① 「AIと人間」ブース (昨年度「AIと意識・言語存在論・

ディープラーニング・パラドックス」の発表を受けて)

②: ノード(モノ)とエッジ(コト)で構成されるグラフ理論によるグラフデータベースは、リレーショナルからどう進化して、それにより何が表現できるようになったのか?

③: AIは本当に意味観測できないのか? 言語獲得できるのは?

④: 感情を感じないことは可能か? 感情をプログラム化できているのか?

⑤: 「法・市場・規範」の限界を「アーキテクチャー」は突破できるか?

⑥: AIは宗教になりうるか?

⑦: AI 脳を手の倫理で制御できるか?

⑧: 人が創るAI音楽とAIが作る人の音楽の違いは?

⑨: 環世界から脱して「疑う力」を持つにはどうしたらいいの?

⑩: 「時は流れず」、無意識をプログラムするには?

*4月7日宗教学者のひろさちや氏が逝去されました。学び祭では仏教関係の資料多くお世話になりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

① 「ダイバーシティ・インクルージョン」ブース

(昨年度「日本人論・死生観・宗教学・弱さの再構築・レインマクス」の発表を受けて)

②: 命は誰のものか?

③: 人は土になれるのか?

④: 妖怪(真怪・仮怪・偽怪・誤怪)の分類と各学問の関係について問う

⑤: 論語から儒教への振れが「倫理にどう絡むか?

⑥: 民族統一すれば平和なのか?

⑦: 生命の本質が「意志」であるとは?

⑧: 公共感覚は氏か育ちか? 作れるのか?

⑨: ポストコロナの生命哲学に美学はどう迫れるか?

⑩: 優生学が見落とすものとは? 遺伝子に優劣はあるのか?

⑪ 「人間と社会」ブース

(昨年度「ユダヤ人論・マスメディア論・民主主義論・貨幣論・負債論・自由論・ノヴァセン・ブロックチェーン」の発表を受けて)

⑫: メタバースにとっての地方の意味とは?

Q20: NFTで貨幣の意味がどう変わり、負債論はどう解釈すればよくなったのか？

Q21: 保守の真の意味を捉えた「新しい民主」の考えは何故必要か？

Q22: ハコモンは存在するのか？誰がハコモンを決めるのか？

Q23: 暗号資産は「言語・法・貨幣」を飲み込むか？

* 4月1日社会学者の見田宗介氏が逝去されました。学び祭では社会学関係の資料多くお世話になりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

④「テクノロジー」ブース

(昨年度「オートポイエーシス・生命科学・植物学・エントロピー・虚数・数理学・量子論

の発表を受けて)

Q24: 遺伝子組み換えや遺伝子操作で、食物や生命の定義を変えられるのか？

Q25: 学んで得たことは遺伝するのか？

Q26: 時間は存在しないのに、どうやって宇宙年齢を計算したのか？エクソトロピーとは？

① から④の4つのブースに分かれて2022年度の

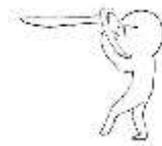
△学び祭△が行われた。社会人向けセミナーでも大学のゼミ

でも企業のスポンサーで行うSTEAM教育でも国からの支援を受けたSSHでもない。とある地方の田舎の高校の探究活動の記録である。税金を大量に使った教育のアウトソーシングが蔓延る中、純粋に学びを楽しみながら、大量の読書を日々重ねて俄か専門家になって探究内容をプレゼンするという△脳に汗をかいた△取り組みである。先輩の学びの肩の上に乗りながらも、同級生の4つのミニ宇宙の相互触発に加え、下級生や保護者の質問で更なる高みを目指していた。これが終わると質疑応答が日常となり△真の反転学習が始まる。一発火花ではないサステナブルな△学びの地産地消△である。そこには、知覚と行動を体系的に身体化する△学びのハビトウス△がある。岡倉天心は、茶の本

で「自らの偉大なものの小ささを感じることができないものは、他人の小さいものの偉大さを感じできない」と述べている。小さいからこそ、少ないからこそ、できる活動がある。学びのあるところが学校である。本気で見つめてほしいものである。

(26個の問いは、高校生の真摯な発表を見学して生じた私の要約である。昨年度の実践は57号と59号を参照された)

△真実の行方△は受け身では追えない。



太極拳教室（会場 定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員



定有堂教室「読む会」

(岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

YBCでコーヒーを

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

今は昔。書店がまだまだ元気の良かった頃のお話である。

昭和五十三年に、八重洲ブックセンターができた時、店内にコーヒー・ラウンジが併設され、目を惹いた。売場の真ん中の中二階という立地で、本の持ち込みができたのである。清算後の本に限っていたが、飲み食いの場を買ったばかりの本を持ち込んで読む、というのはちよつとした(コロンブスの卵で)驚きを以て迎えられたのだった。

さらに、八階には読書ロビーなる、有料読書室があった。ただソファがあるだけの休憩所だったが、やはり店内で本が読める(くどいようだが清算済に限る)ということで一頻り話題になった。セルフサービスでお茶も飲めた。

もちろん、植草甚一や古書愛好家のエッセーを引くまでもなく、手に入れたばかりの掘り出し物を、近くの喫茶店で広げて、一人悦に入る、もしくは仲間同士で披露(自慢)し合うという美風があるのは知っている。

しかし、それは、釣果の確認であって、腰を据えて読む、というのとは自ずと違う。(神保町界隈に老舗の喫茶店が多いのは、学生街であった頃の名残である。確かに(へきぼうる)の地下で、トロツキーやサヴィンコフを読めば、サマになるとは思うが)

その神保町に、三省堂書店の新しいビルができたのが昭和五十六年(その建物も、目下、建替えのため取り壊し中である。ああ、日も暮れよ鐘も鳴れ、だ)。地下にビアホール、二階の一角に喫茶店が入った。地下は独立しているし、喫茶も、売り場続きとはいえ、ガラス壁で仕切られ、未清算の商品が持ち込めるような設えではなかった。あくまでも、お休み処か待ち合わせ場所であった。

五十三年にできた神田古書センタービルのテナントにも、カレー屋が一件入っていた(今は、もう少し増えている)。店舗としては独立しているが、同階フロアの古書店に入ると、当然ながら匂う。カレーだから強烈だ。当初は、か

なり違和感を覚えたものだ。(かつて、職住一体の古い三ちゃん本屋などに入ると、帳場の奥から魚を焼く匂いが漂ってくるのがあったが、そんな艶消し感に近い)

古書店街に、老舗の歴史書専門店があり、二階の一角に喫茶コーナーがあった。これは、完全に店舗の続きで、壁際にカウンター席があり、客の背中の先には本棚が並んでいる。店主夫人がコーヒーを入れ、手作りのケーキを出してくれる。喉が渴いたら、ちよつと寛いでくださいなという感じで、本を読むことが想定されていないのは当然であった。心優しき夫が、妻のために趣味と実益を兼ねた場所を拵えた、といったほのぼのとした雰囲気が漂っていた。

そもそも古本屋は立ち読みを大変嫌う。長居は無用。主人の顔が険しくなる前に退散するが吉。座り読みなど言語道断。引き回しの上、磔・獄門ものである。

少し事例は異なるが、平成二十三年、大阪にジュンク堂が進出した時、池袋本店や紀伊国屋梅田店を超えるメガ書店として話題になった。売りのひとつが、フロアに椅子とテーブルを置いて、商品を自由にお読みください、としたことだった。(一冊タダ読みしても苦しからず、ということだ)本棚も重厚で、図書館の雰囲気を出したかったらし

い。

久しく行っていないので、現在はどうかなのか確たることは言えないが、HPのフロアガイドやネット画像を見る限り、壁際はみっちり本棚が立って、くつろぎのスペースらしきものは見当たらず、本棚の端にベンチ様のものがあるだけ。それも通路に面しているから、引つ切りなしに人が行き交う。どうやら長居は歓迎されないらしい。

結局、八重洲BCの読書ロビーにせよジュンク堂の読書コーナーにせよ、万事に余裕があった良き時代の幻に過ぎなかつたようだ。八重洲のラウンジは、直営からテナントになり、現在は某コーヒー・チェーン店が入っている。フロアも二層になり、電源、三、三、個人ブースなどが設けられ、半ばシェア・オフィスといった佇まいである。(おすすめ本棚まである…)

蛇足ながら、八重洲BCには、ティファニーというレストラン・カフェが入っていたことがある。

鳥取あれこれ その七十

内田 克彦

(地域研究家)

(承前)

確かに、この時期、京都では「薩長土因」と言われているのだらう。以前、ネット上で「薩長土因」で検索してみたところ、次のやり取りがヒットした。

山根雅夫【】相談【】明治維新は薩長土肥ではなくて薩長

芸だったについて

磯田道史 薩長土因の論説

近世暗殺史(1956年) (歴史新書) 村雨退二郎(著)は薩長土因を紹介した戦後では
はやい文献だったと記憶。

そこで、鳥取出身の作家でもある、村雨退二郎『近世暗殺史』を見てみると、次のように記述されていた。

攘夷熱が、最高潮に達した文久三年当時、その急先鋒と目された雄藩が四つある。薩摩と長州と土佐と因幡。

これを「薩長土因」と呼んだ。〔略〕

島津や毛利に、関ヶ原以来の感情があるように、池田には池田の伝統的対幕感情がある。池田は徳川幕府成立以前からの大名で、徳川家の譜第(ふだい)ではない。岡山の池田と鳥取の池田と、二軒に別れているけれど、両方あわせると六十余万石という大勢力、機会があつたら幕府を向うにまわして、天下を争つてみたいくらいの気概は、家中の侍の胸の中に温存されている。

因みに、文久三年二月に備前岡山藩主となつた池田茂政は、慶徳の(従つて一橋慶喜の)二歳年下の弟である。

ところが、私は、大学時代の一九七五年度に、毛利敏彦先生の「日本政治史」を受講し、「幕末の薩摩藩は、終始一貫、開国論を藩論とし、尊王攘夷運動と対立してきた。」「これまで、明治維新における尊攘思想、尊攘運動の役割は、過大評価されてきた。」との講義を受けている。

とすると、「薩長土因」と言つても、この四藩が同じ思想のもとに一つの塊として幕末の政治を動かしたわけではないのである。薩長両藩については、各藩士の名前がよく知られ、小説・ドラマにも登場しているのは、薩長藩閥政府がその後成立したからであらうが、その中に因州

藩のことがほとんど出て来ないのは誠に残念である。

帰藩

さて、慶徳は、文久三年六月二一日、鳥取を発し、二七日に京都に入り、本圀寺に本陣を構えた。この時期、京都政局は攘夷実行のための天皇親征論で沸騰していた。『維新史』（維新史料編纂會）の索引に基づくと、慶徳の名が次の順で頻繁に出て来る。

攘夷親征反対上書

池田茂政・蜂須賀茂韶と攘夷親征自重啓申

馬揃天覧を内奏聴許さる

池田茂政・蜂須賀茂韶・上杉齊憲と共に攘夷親征猶予

奏請

八月十八日政変とー「上杉齊憲・池田茂政・加藤泰秋・

因州藩支藩鹿奴主池田仲建伊勢守・分部光貞・加藤

泰令等も相踵いで参内、蜂須賀茂韶八ツ半時頃漸

く参内、池田慶徳は、前夜の藩の内訌事件の為、漸

く夕七ツ時頃最も遅れて参内」の参内

召命参内

横浜鎖港督促の為東下を命ぜられ後辞退す

慶徳・茂政・蜂須賀・上杉の四藩主の攘夷建議

同四藩主の七卿及び長州藩主父子寛典請願

慶徳は、「九月八日自藩の防備・隣藩の救援・藩の内訌を名として帰藩の暇を請ひ」一〇月二一日京都を発ち、一七日鳥取に帰った。それ以降、上京することはなかった。

さて、安場は、文久三年七月、御台場御普請御用懸り（大田氏は、どこの御台場であるか不明であるが、藩内全域の御用懸りと思われる、とする。）、次いで鉄砲類御製造懸りを仰せ付けられる。

八月には、西洋流大砲教授を仰せ付けられ、さらに「八月に浜坂台場は完成した上で」、九月、浜坂傍示へ野戦台場を築造に付、御用懸りを仰せ付けられ、翌元治元年四月には、昨年八月より普請を進める賀露西浜御台場完成の旨申達し、御軍式方頭取が上申している。

そして、藩内での御台場築造が進む中で、元治元年五月、摂海御台場御取立に付、板倉周防様より、早々に登坂し、御台場御用を勤める様仰せ渡される。

この摂海御台場は、勝の設計であり、勝の推挙と思われる。因みに、その総責任者は佐藤与之助である。

（以下、続く）

二〇二二・五・二五

八代日記

(二十七)

齊藤 仁昭

元長崎書店

五月某日

下の子が「マスク」を「マクス」と言い間違えていてなんだかわいらしい。じぶんは小さいころ「おくすり」を「おすくり」と言っていたらしい。「く」と「す」が入れ替わっているところが同じだ。なぜ言い間違いはかわいく感じてしまうのだろうか？あとけなさが強調されるからだろうか。

下の子は近頃『となりのトトロ』を毎日のようにみている。草壁姉妹の下の子、メイちゃんもいい間違いをする。とうもろこしはどうもころし。おたまじやくしはおじやまたくし。やはりかわいい。

子どもがみているトトロを横目でちらちらみているがシヨットというのか演出というのか、画面をみていて飽きない。そして終盤ではいつも泣かされてしまう。

シヨットと言えば蓮見重彦『シヨットとは何か』（講談

社）を購入。例によって少ししか読めてはいない。学生時代に映画狂人シリーズを眠る前に読むのが習慣だったがあれは幸せな時間だったなあ。いろいろな本を寝落ちするまで、明け方まで読める幸せをまた味わいたい…。

五月某日

夕方遅くに三回目のコロナウイルスワクチンを接種した。前回と同じく熊本県主催の集団接種を受ける。相変わらず素晴らしいスタッフによるオペレーションでスムーズにことが進む。接種後に配られる注意事項などの記載された書類の入ったクリアファイルに、くまモンのデザインが施されていて、こんなところまで気が効いているなど思ってしまった。気が効いているだって？いつからくまモンに好意的になってしまったのだろうか自分は。あんなものなくてもいいって言っていたじゃない。侵食されている。

あらゆる政治的な事柄もや社会的な事情もこんなふうになし崩しに侵犯してくるんじゃないだろうか。意思の壁を高く強く維持することはとてもとても難しい。いや壁のように思考するから侵されやすいのかも知れない。ぶよぶよしたスライムのような鏡。あるいは隠れ身の術。光学迷彩。常に彷徨して照準を定めさせない。すでに侵されたふりをする。徹底した理論武装、あるいはやられる前にやる。

いやそもそも侵犯ではなくそれは自らが望んだことなのでは……？変節を認めたくないがための言い訳。ただの加齢による丸まり。諸行無常。ひとまずそんなクリアファイルはメルカリで売ってしまえ。などなど。副反応への拒絶感から余計なことばかり接種後の待機時間に考えた。

五月某日

接種翌日に熊本城内の公園で子どもの保育園のお見知り会が開催された。まだ軽い倦怠感くらいしかなく、熱もなかったのでワイフとともに出席することにした。知人のパパママと軽く会話してあとはあまりはしゃがないようにぼんやりして過ごした。クラスの役員決めなども無事に終わりお菓子をもらって解散。

帰りの車内で悪寒が到来。いらっしやいませ。帰宅してすぐ検温したらまだ三十七度くらいだったけれど手先と足先が冷たくなっておりこれはいままら発熱間違いなしの兆候。ひと眠りして起きたら汗だけで三十九度六分。頭痛も始まる。ようこそここへ。以後二十時間くらい布団の中でぼぼ寝ていた。とにかくくだるくて、頭痛がつかかった。翌日昼に解熱。新しい体となる。なったのか？

五月某日

大友克洋全集の第三回配本分が入荷したと長崎書店店長より連絡をもらう。順調な刊行だ。たまには長崎書店でゆつくり過ごしたいので時間が取れるときに受け取りに行こう。

頭のなかなか
回らぬ朝なの
身体は元気
水は美味しい

河原のテントで
畑を眺める
身体は元気
水は美味しい

(ケバブジョンソン「マノー」作詞：橋本悠)

この独壇場ではある…其の表現のドライさ、強さ、先鋭さ故に、悲劇の深刻さが一層増したやうに聞こへ…「エグイ」事此の上無ひ。仕掛け人の僕はさしずめ小悪魔の手先と化したやう、チンピラ宜しくほくそ笑み乍ら…悪魔に乾杯！

2022.05.17

【今回のディスク】

D. ショスタコーヴィッチ (1906～75)

第八交響曲ハ短調 Op. 65 (1943)

① A. ロジンスキー指揮 N.Y. フィルハーモニック
N.Y. ライヴ 1944. 10月15日

② A. ガウク指揮 国立放送交響管弦楽団
1955. ライヴ 9月24日

③ E. ムラヴィンスキー指揮 レニングラード(現聖ペテルブルク) フィルハーモニー rec1947

同

弦楽四重奏曲第8番ハ短調 Op. 110 (1960) ～ナツイスの犠牲になったユダヤ人追悼の為に～

- ① ベートーヴェンQ (モスクワ)
- ② ボロディンQ (rec. 1978. モスクワ)



(イラスト・秦阜梅林)

本屋になるかもしれない人の備忘録

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

最近になって、自分は将来本屋をやり出すのではないかと思った。

私の家族は、それぞれに本の趣味は違うものの、本を買いすぎてしまう家だった。家の中の本をまともに数えたことはないが、私が鳥取に持ってきた本ですら、五百はありそうなものだから、二千くらいは置いてあるのかもしれない。(おかげさまで、家はずっと大学教授の研究室のようになっっていたけれども。)

買い物に行けば、本屋にとりあえず置いて行かれて、時間を潰していた。子どもの頃から本屋は身近だった。

そんな風だから、ある時、児童書のコーナーって同じ本しかないと感じてしまった。同じ本ばかりでは飽きる。もっと違う本を読んでみたいけれど、どれがいいかまではわからない。

そんな風に思い始めた小学生の夏休み、銀座にある「教文館」に連れて行かれた。一番上の階は、「ナルニア国」と呼ばれ、子ども向けのフロアなのだが、選書は独特で、定番の児童書ばかりでなく、その間に一般向けの小説なども置かれていたのだ。そこで初めて手に取って読んだ本『私の中のあなた』のことは忘れない。子どもだからと線を引くのではなく、真剣に本を選び取ることで、子どもを馬鹿にしない大人になろうと思ったのは、その時だった。それはとてつもなく難しいことでもあるのだが。

中学に入って東京へ引っ越したばかりの時は、図書室に駆け込んだ。女子校でそれなりの蔵書があることを誇りにしている学校であったのだが、地下一階に広がる図書室は今思えばかなり広かったように思う。友達がいなくとも、ひとまずここに本があるなら、私は乗り切れるだろうと確信のいたものがあつた。

実際、高校に入るとレポートやレジュメを作らされる授業があつたのだが、意外と学校の資料が使える。おそらく、何年も同じ教材を大事に使い続けているからか、例えば、夏目漱石の『こころ』を扱う授業があるために、漱石研究の研究誌などもあつたくらいだ。

現地の言葉を知らない留学先で一番苦労した、というかつまらなかつたのは、本との出会いがなかつたことだ。

トルコでは、現地で子ども向けの本をトルコ語学習用と買って買ってみたりしたのだが、結局使うレベルにまで至らなかった。本屋といっても、文房具屋と半々といった店舗が多かつたように思う。

海外を旅しながら、日本の本屋文化は独特なものだと気付かされる。大型書店は見もしないし、これだけ多種多様な街の本屋もない。日本人のイメージする「本屋」あるいは「書店」と、「bookstore」には大きな隔たりがあるだろう。

実は、今鳥取に来ているのも、本のおかげである。

今の勤務校は、学校の中心の吹き抜けが「ラーニングセンター」と呼ばれ、「学校全体が図書館」のようになっていて、自分が通っていた学校では、本は地下の住人だった。ここでは、本はそこら中にあるのだ。

そして、鳥取では街の本屋に魅力を感じた。「定有堂」をはじめ、湯梨浜にある「汽水空港」など、県外からも注目されるような本屋がある。

そんな風な本の居場所に惹かれて、東京から来た。

なぜ、図書館より本屋の方が好きなのだろうと思う。

私が本屋好きなのは、本を所有することを通して自分がその知識を自分のものにする予感を感じられるからかもしれない。買ったところで、自分の知識になるわけではないのだが、その可能性を感じられることに喜びを見出すだろう。

かつて父が、本の内容をパッとダウンロードするみたいに頭に入れ込めたらいいのにといつていた。だが、お互いにわかつていたはずだ。そんなことをしてしまえば、楽しみがほとんどなくなってしまうということ。

こうやって本屋をやりたいと思うのは、今自分が鳥取にいるからかもしれない。東京に行ってしまうえば、本屋はいくらでもある。大型書店から、「Title」「Reading」「Writing」「BOOKSTORE」「B&B」など。なんだみんなやってるじゃないかという気分になる。

一方で、自分が囁く。誰かの便利な手足になっていいように使われないうためには、自分で場所を作ってまわさないといけないよ、と。でもその一方で、私は誰かが集まる場所を作りたいほど、人と繋がりたいたいかとも思ってしまう。

カレー

あきの素生

(へうねるめがね)



毎日カレーでも構わない、と思うくらいにはカレーが好きだ。市販の辛口のルーを使った、ごく普通のおうちのカレー。カレーだと、ご飯をたくさん食べたくなる。食べ終わるときみしくなる。暑くなつてくると、自然と食べたくなつてくるから不思議だ。

カレーを初めて自分で作ったのは、野外活動の飯盒炊爨だったかもしれない。小学五年生のときの野外活動の記憶は臆気だが、野菜が半煮えでしゃばしゃばの失敗カレーになったことだけは、なんとなく覚えていいる。それでも、飯盒で炊いたご飯と一緒にみんなでわいわい食べれば、それなりにおいしかったはずだ。

それから幾度となくおうちカレーを作ってきた。市販のルーを二種類組み合わせるとおいしくなると聞けば、二種

類のルーを常備したし、いや、ルーは二種類でにんにくと唐辛子とバターと砂糖を入れるといいとテレビで見れば、それを試してみたりもした。少しずつ、いろんなこだわりを取り入れながら、日常に溶かし込むために、取り入れたこだわりを捨てながら、今では「とにかく作れるカレー」に落ち着いている。

「餡色の玉ねぎ」は、手放したこだわりのひとつだ。一度オニオングラタンスープに挑戦したことがある。レシピには玉ねぎを弱火でじっくり、濃い餡色になるまで炒めるように書いてあり、結局五十分くらい玉ねぎを炒め続けた。(以来、食べたいと思っても、作りたいと思っただけはなし。)そこまでは行かないまでも、なるべく弱火で時間をかけて玉ねぎを炒めることで、カレーがおいしくなると信じて頑張っていたが、あるとき食べた、すべての具材を同じくらいの時間じっくり炒めたカレーがとてもおいしかったので、徐々にこだわりがほどけていった。丁寧に炒められた餡色の玉ねぎで作るカレーに思いを馳せながら、玉ねぎにそこそこ火が通り、透きとおってきたら、さくさくと次の工程に進んでいる。

カレーの圧倒的でゆるぎないアイデンティティが、具材の自由度を高める。何を入れたってカレーになるという安心感が、カレーにはある。(隠し味というには多すぎる

量のインスタントコーヒーを入れてしまったときだけは、コーヒーの苦みが勝って取り返しがつかなかった。後にも先にもあれほど不味いカレーを食べたことがない。(学生)の頃、安くて歯ごたえがよいという理由で、豚の軟骨をカレーに入れていた。やわらかくなるまで煮込むなんてことはしない。顎とこめかみに痛みを覚えながら、ごりごりと軟骨をかみ砕いて食べた。一度友人に食べさせたら、その半端ない硬さに笑い出した。ちゃんと食べ切れたのだろうか。覚えていない。社会人になってからは、鶏の軟骨と大豆の水煮を入れたカレーをたまに作る。玉ねぎ以外の具材を切らなくてよいというのが、最大の魅力だ。あと、鶏の軟骨は歯ごたえが程よい。

今でも保っているこだわりといえば、玉ねぎに火が通ったら、生姜とピーマンのみじん切りを加えて香りが出るまで炒めること、くらいか。そんなにたくさん入れるわけではないので、本当に味に影響しているのかわからない。おまじないみたいなものかもしれない。

小学生の頃、母が病気になって数か月入院した。その間、祖母が私たち孫の面倒を見に来てくれた。最初のうちこそ、遠慮のような照れくさきのような、ふわふわとしたものが祖母と私たちの間にはさまっていたのだが、二、三日もす

ると、そのふわふわは消え去って、日常の私たちに戻った。つまり、時に生意気で、かわいげのない子どもになぜ、来てくれたばかりの頃のように、祖母に優しくできないのかなと考えた日もある。母に会えないことから派生するあれやこれやも、多分に混じっていただろう。そんなある日、祖母がカレーを作ってくれた。ミックスベジタブル入りのカレーだった。茶色いカレーにぶちぶちと浮かぶグリーンピースの丸い緑、コーンのつややかな黄色、にんじんの真四角な赤。いつもより少しカラフルになった祖母のカレーは、くさくさしていた気持ちをぱっと明るくしてくれた。それは一時的なものではなく、母不在の淀んだ毎日、風穴を開けてくれたように思う。

今日に至るまで、不思議と自分で作るカレーにミックスベジタブルを入れてみようと思ったことがない。あのととき、祖母が作ってくれたからこそ特別なカレーだからかもしれない。

レンキン☆ドリーム



ドレメリア

(座敷わらし)

長い一週間がようやく終わった。わたしの職場を含む多くの高校では、「今週」は八日間だった。月曜からぐるりと回って月曜までが勤務日で、火、水が休日。シフト制勤務から離れて暦どおりの毎日に慣れた身体には、久々の八連動は体力的になかなかしんどく、最終日のオンライン研修では疲労で少しテンションがおかしくなっていた。

一方、その副産物である貴重な平日休みは、思わぬ幸運をもたらしてくれた。立ち寄った書店で大好きな作家角田光代さんに遭遇したのだ。聞けば新作の取材で鳥取に來られていて、二時間後の飛行機で帰京されるというから、たまたま今日が休みでなければあり得ないタイミングだった。作家にお会いするのは初めてではない。大学時代はミス研に所属していたので、人気シリーズを複数抱える売れっ子作家日氏や、トリックを駆使した作品群で知られる本格系作家A氏に間近でお目にかかったこともある。もちろん「学生その一」「後輩C」程度の有象無象ではあるが。

でも、白状するとそれほど心躍らなかった。好きなのは作品であって本人じゃないんだよなと思っていたからで、今でも基本的な感じ方は変わらない。そう思うと、会えて飛び上がるほど嬉しいこの人は、やっぱり自分にとって「特別」なのだ。たとえ自分は「本屋の客その二」でも。

後ろ姿を見送ってから、握手をお願いし忘れたなど気づく。応援してますと伝えきれなかったとも。でも、思い残すことが何もないより、その方が現実らしい。でないと、エッセイやインタビューと変わらぬ温かな人柄も、素敵なメッセージも、ハレンキンがもたらした夢だったと思ってしまうだろう。

いや、何ならここまでが夢なのかも。



・編集後記:

サンロード内に新しくできた「砂鳥ビル」のオープニングに行ってみました。知った顔もちらほら、楽しそうな場所。気になっているカレー店「せかいのまんなか」さんも出店されるそう、一度食べてみたいですね。

ドレメリア (編集長)

「近所に「共有地」活動が広まっています。そういえば二十年ほど前、「持ち寄り夕食会」に熱中していました。その後「焚き木の持ち寄り」という「焚き火論」などを主張。記憶の奥底の話です。

奈良敏行 (発行人)